

2009年4月27日日本テレビ記者会見

《 全文 》

＜発表事項＞

①. 日本テレビの新キャンペーンキャラクター、「日テレ・ダベア」。

今年の日本テレビの番組コンセプトは「つながる」です。さまざまな番組、イベントと視聴者を「つなぐクマ」＝「ツナグマ」がキャラクターです。既にホームページ上で後ろ姿の熊、ダベアのブログが連載されていますが、5月8日（金）に熊が正面を向いて、顔が発表されます。

②. ゴールデンウィークイベントのお知らせ。

今回の全体コンセプトは「たからもの」。イベント会場内で「たからばこ」5つを探し、キーワードを並べるとスペシャルプレゼントを差し上げるというものです。映画の試写会や、番組関連イベントも数多く展開します。是非一度足をお運び下さい。

1. 期首特番の手ごたえと4月改編の動向について

記者：4月改編の目玉である、「おもいッきりDON！」と「サプライズ」が始まりました。反響はいかがでしたか。また、「ザ・クイズショウ」「アイシテル～海容～」といった今クールのドラマやプロ野球中継についてもご説明をお願いします。

細川知正会長兼社長：「サプライズ」がどういうスタートを切るかが、一番大きな期待であり、心配もありました。まだ放送が始まって3週間なので、はっきりとは言い切れませんが、少なくとも先週の前半までは、想定したよりもいいペースで推移してきたかなという気がしています。しかし、先週の木曜、金曜は、例の草彅さん問題への対応が少し鈍かったかと反省しています。

「おもいッきりDON！」は、ターゲットを大幅に変えましたので、まだちょっと定着していないという感じを持っています。

プロ野球中継は、放送した本数がまだ少ないので、はっきりした判断は出せません。ただ、BS放送の視聴者数はかなり伸びていると聞いていますので、全体としては、テレビのナイター中継は今のところ順調と考えています。

舛方勝宏専務：先週は乱気流というか、草彅さん問題の影響を相当受けました。

「サプライズ」は、放送スタートから順調に推移していました。1週目の平均視聴率が6.87%、2週目が9.78%、3週目で10%の大台に乗ると思っていたのですが、木曜日から様変わりしまして、週平均で8.1%に下がりました。

その裏でNHK、TBSのニュース番組の視聴率が2ケタになりました。

一方、私どもの「NEWS ZERO」も先週、番組開始以来歴代3位と4位の視聴率をとりました。21日（火）は、これは草彅さんとは関係ありませんが、11.8%で歴代3位。23日（木）が草彅さんが逮捕された日で11.0%、歴代4位でした。先週は、ニュース番組の視聴率が非常に高かったと言えるのではないかと思います。

24日（金）に草彅さんの会見があり、19時から始まるなら番組で取り上げたいという思いもありましたが、会見は21時からということで、2時間も先のことを放送するわけにもいかずやめました。すると、NHKの「NHKニュース7」が非常に高い視聴率をとりました。

先週はニュースへの対応という意味ではタイミングが悪かったと思っていますが、「サプライズ」のターゲットとする若い世代層、女性層に向けては、いい傾向が出ています。もう一回仕切り直しをして視聴率を上げていきたいと思います。

「ズームイン！！SUPER」は、フジテレビの「めざましテレビ」に視聴率で先々週は完勝、先週は3勝2敗でした。2月頃、一時視聴率が少し落ちて心配しましたが、完全に回復しました。

「おもいッきりDON！」は、10時25分から11時30分の第1部の視聴率は4.5%から5%弱、11時55分から13時55分の第2部が5%にちょっと届かないという状況で、2部がやや苦戦しています。1部の視聴率は、横並びで大体他局に勝っているのですが、2部と同じ時間帯にはフジテレビの「笑っていいとも！」がありますし、50歳以上の女性層はテレビ朝日の「ワイド！スクランブル」に流れていると分析しています。2部のこの入れがこれからの課題だと思っています。

プロ野球中継は、4月3週までの平均は、今年はナイトゲームで12.5%です。これは06年の12.7%とほぼ並ぶ数字です。08年が10.5%、07年が10.9%、06年が12.7%で、明らかにWBC効果が表れています。視聴者層を見ると、4月12日（日）のデーゲームでも少し変化してきました。13歳から34、5歳の層が1.5%ぐらい上がっています。これは大変うれしい。若い世代が目を向けてくれたという意味で、私どもにとっても、野球にとっても、非常にいい傾向が出てきたととらえています。巨人の坂本選手など、若い選手の活躍も効いているのかなと思っています。

期首の番組は、あくまでもレギュラーを延長する方針です。レギュラーを軸にして2、3時間のスペシャルを組むという戦術を探っていて、大変成功したと思っています。「ぐるぐるナインティナイン」は18.8%、「ザ！世界仰天ニュース」は15%近く、「行列のできる法律相談所」は18%とっていますので、レギュラーを強化していくという意味で大変よい結果が出ました。

ドラマは、火曜日はバラエティ番組に変えて、水曜と土曜に絞り、水曜日は「アイシテル～海容～」、土曜日は「ザ・クイズショウ」を立てました。「アイシテル～海容～」は、1回目は13.2%だったのですが、2回目の先週は13.7%と、わずかですが上がっています。全局21本のドラマがスタートしましたが、1回目から2回目で視聴率が上がったドラマは3本しかありません。テレビ朝日の「臨場」、TBSの「ゴッドハンド輝」、そして「アイシテル～海容～」です。他は大抵2回目で視聴率を下げています。

「ザ・クイズショウ」は、14%でスタートしましたが、11.9%と先週は下がりました。テレビ朝日のドラマとフジテレビの映画に挟まれた影響が出たと思っています。

4月期がスタートして、視聴率に凹凸はありますが、「サプライズ」は通常に戻れば目論見どおりの視聴率は取っていけるだろうし、「おもいッきりDON！」ももう少してこ入れをしてやっていこうと考えています。

2. 放送外収入の動向

記者：放送外収入の動向、「ヤッターマン」「おっぱいバレー」など映画の状況も含めてお話しください。

細川会長兼社長：いわゆる放送外収入は、映画事業、商品事業、それから展覧会を中心とするイベント、CS・CATVを含むライツ関係のビジネスがあります。前年度の売り上げで言うと、全体として対前年比5%強伸びています。ただ、商品事業に関しては前々からお話ししているように、原価率が上がってきている状況です。

映画事業で売上げが伸びた一番大きな要因は「崖の上のポニョ」です。もつとも、日本テレビの幹事作品ではありませんので、利益率というのは、それほど大きいわけではありません。

今年度も、映画関係、イベント関係、順調に滑り出しています。

島田洋一常務：4月に新しく公開された作品は2つ、いずれも4月18日公開で、私どもの幹事作品「おっぱいバレー」、もう1つは、読売テレビ主幹のアニメー

ション「名探偵コナン 漆黒の追跡者（チェイサー）」です。さらに、3月7日公開の「ヤッターマン」は、いまだに上映継続中です。

「おっぱいバレー」は、正直申し上げて、タイトルが悪かったのかな？とも思うのですが、あまり女性のお客さまに来ていただけていない状況です。比率から言うと、男性のお客さまが相当多い。作品の中身は中学校のバレーボール部を舞台にした、いわゆるスポーツ根的な生徒の成長物語であると同時に、綾瀬はるかさん演じる女性教師の成長を描いた作品でもありますので、女性にも十分楽しんでご覧いただけるものだと思っています。ゴールデンウィークに向け、様々なPR展開をしているところです。

「コナン」は劇場公開前に、金曜ロードショーで関連作品をお送りしました。まず3月27日に日本テレビ55年特別企画・読売テレビ50年特別企画として、アニメ史に残る夢の対決！「ルパン三世VS名探偵コナン」というテレビ版のスペシャルアニメーションを制作し金曜特別ロードショーとして放送。また、公開日前日の4月17日には、「名探偵コナン 戦慄の楽譜（フルスコア）」という劇場版作品を放送しました。こうした効果もあってか、順調にお客さまの数を伸ばしています。作品としても非常に完成度が高いので、今後も期待しています。

「ヤッターマン」は先ほど申し上げましたように、まだ公開を続けており、ゴールデンウィークが明けた頃には、興行収入で30億を超えることは間違いないありません。

開局55年記念事業である「ルーブル美術館展—17世紀ヨーロッパ絵画—」が上野の国立西洋美術館で開催中ですが、こちらも多くのお客様に来ていただいている。6月14日までですので、一人でも多くの方にご覧いただきたいと思っています。

3. 3月の営業状況と通期決算見通し

記者：3月の営業状況と通期決算の見通しについてお願いします。

細川会長兼社長：3月の営業状況、日本テレビ単体の3月単月の状況ですが、残念ながらやはり収入は下がっています。売り上げに関しては、タイムとスポットを合わせた放送収入は前期比で89%台。総収入に関しても、前期比で90%を少し欠けるか欠けないか、実際には89.9%くらいの数字です。

通期の決算の見通しについてですが、4月30日（木）に単体の決算を出します。中間期は赤字でしたが、特に第4四半期、収入面では減収幅はかなりあったものの、中間期の決算が見通せる段階から号令をかけてコストコントロールに努めてまいりましたので、最終のワンクールでそれなりに成果が出ました。

結果としてはあるレベルの営業利益を確保できたかなという状況です。

記者：始まったばかりの今期の見通しについてはいかがですか？

細川会長兼社長：まだ、いわゆる月次締め、4月の実績がまとまっていないので何とも言えません。スポットに関しては、やはり極めて厳しいということしか今の時点では申し上げられない。したがって、総体に関しても、かなり厳しい見通しの下にスタートしていくことになる、そのように考えています。

4. 地デジの進捗状況

記者：エコポイントの話も進んでいますが、地デジの進捗状況をどのようにご覧になっていますか？

細川会長兼社長：国の施策としてテレビのデジタル化が進められていますが、現在、政治レベルで具体的な方策が打ち出されています。その中には、地デジへの切り替えが経済的に難しい世帯に対する具体的な救済策や、経済対策の一環としてのいわゆる「エコポイント」の活用があります。これについては特にテレビは、他の家電よりポイントがさらに5%上乗せされます。こうした施策を最大限に活用し、多少遅れているといわれている普及スケジュールを一気に立て直せねばと考えております。今年度は地デジ普及を大幅に拡大するための勝負の年です。私どもは地デジ普及に関するあらゆる施策に最大限協力して、スムーズな地上デジタル放送への切り替えを図っていきたいと考えています。

記者：先日、NHK放送文化研究所が全国の自治体などを調査したところ、移行延期を望む声も出たというような結果が出ていますが、どうご覧になりますか。

細川会長兼社長：私どもとしては、国の施策として設定された方向へ向かって全力を尽くし、肅々とやっていくということに尽きます。「後ろに延ばすぐらいなら、前へ倒すほうがあらゆる意味でメリットがある」ということを、常々申し上げていますが、これは私どもの業界にとってのメリットだけを主張しているのではありません。

5. 「バンキシャ」について

記者：「バンキシャ」の取材体制およびBPOの調査状況はどのようになっていますか？

細川会長兼社長：2班でやってきた取材体制を、より余裕を持たせるため1班制にするということは既に実施しております。人を増やすことやクオリティーを上げることは急にはできませんが、報道局の中に「危機管理チーム」を設置し、ベテランの取材記者を中心に内容をチェックしながら、高い緊張感をもつて番組制作を続けているというのが現状です。

一方、BPOによる調査は、番組担当者に対するヒアリングという形で進んでいます。これについては、全面的に協力させていただいている。このため、現在は、別の角度からの社内での検討・調査は行なっていません。引き続き調査に協力しながら、今後の対応を行っていきます。

番組の継続についてですが、従来から私どもは、基本的に継続すると申し上げて参りました。視聴者の皆様からは一定の評価と信頼をいただいている番組だからこそ、番組を通して「名誉回復」を図りたいと考えています。現在は、BPOによる調査段階ですので、ご判断が出された時点で、最終的な私どもの対応を考えたいと思います。

6. その他

記者：最近のメディア報道に対して、日本アドバタイザーズ協会が緊急声明を出していますが、見解はいかがですか？

細川会長兼社長：声明に挙げられている事例はそれぞれ事情が違いますが、私どもについてご指摘いただいている部分については、まさにわれわれ自身も一連の反省の中で自覚していることです。声明は真摯に重く受け止め、丁寧に対応していきたいと考えています。

記者：民放連が放送基準を改定し、通販番組に関する「留意事項」を付け加えましたが、ご見解をうかがいます。

細川会長兼社長：私どもはこれまで十分留意して参りました。今後も指摘されているひとつひとつについて改めてチェックし、確実にやるべきことをやりながら事業を進めていく所存です。（了）